

卷之五

隨筆集



紀行隨筆集

〔附〕

春

嵐

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和四年八月九日印刷
昭和四年八月十二日發行

現代日本文學全集 第三十六篇

著者代表 戸川 明三

發行者 山本 美

印刷者 杉 山 愛二



發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替東京八四〇二番
電話芝(43)二三二一四番



影 照 家 諸

水曜軍運(9) 骨秋川戸(8) 木亮田平(7) 蝶風場馬(6) 衣羽島式(5) 江雨井鹽(4) 月桂町大(3) 女直合落(2) 樹健田和大(1)
得景川寒(17) 亭溫京篠(16) 太方西本阪(15) 桐悟碧東河(14) 雅風江吉(13) 木島島小(12) 男蘭田柳(11) 昂重賀志(10)

「紀行隨筆集」目次

卷頭寫眞(諸家
攝影)

序……………二

大和田建樹篇

大和めぐり……………四

千里の春……………一八

落合直文篇

七株の松……………三

恩愛の刃……………六

弦月の旗……………一五

大町桂月篇

迎妻紀行……………一五

かた袖……………四

須磨の一夜……………五

鹽井雨江篇

ゆくの音……………一七

武島羽衣篇

金明の水……………一七

霧分衣……………一七

龍華寺の富士……………八三

日和つゞき……………八六

教へ子……………八七

歌御會始參列記……………八九

北陸游草……………九〇

馬場孤蝶篇

閑時想……………九四

湖畔の秋……………九七

古き東京を思ひ出て……………一〇〇

旅客より觀たる大阪……………一〇六

煙霞になづみて……………一二

虚と實……………一五

平田禿木篇

薄命記……………二〇

蟬羽子を用ふ……………二五

三日風流……………二七

うすむらさき……………一四

スミルナの花……………一六

ル、サントオル……………一六

ロオリイの生家……………一四

戸川秋骨篇

別進行……………一四

文鳥……………一五

ミネルヴァへ……………一六

運塚麗水篇……………一七

不二の高根……………一七

成道中記……………一七

志賀重昂篇……………一七

日本風景論……………二〇

緒論……………二〇

日本には流水の浸蝕……………二〇

激烈なる事……………二〇

柳田國男篇……………二〇

遊海島記……………二〇

木曾より五箇山へ……………二六

勢至堂峠より白河へ……………二六

熊野路の旅……………二六

丹波市記……………二六

小島烏水篇……………二六

不二山に登る記……………二四

峽谷の白百合……………二五

天龍川……………二五

ヨセミテ谷と上高地……………二六

吉江孤雁篇……………二六

御嶽山の兩面……………二七〇

霧の旅……………二七

北國の旅……………二六四

海洋の旅……………二六六

河東碧梧桐篇……………二六六

雪線越七日日程……………二六六

阪本四方太篇……………二六六

夢の如し……………二六六

篠原温亭篇……………二六六

波の音……………二六六

其妻のピヤノ……………二六六

彼女と其周圍……………二六六

寒川鼠骨篇……………二六六

進水式……………二六六

犬と余……………二六六

美哉山林……………二六六

諸家略年譜……………二六六

附錄……………二六六

島崎藤村作……………二六六

序

隨筆の世界には約束がない。従つて誰もが親しみ得ると共に、容易にものし得る。かくてこの世界は縦に、また横に、あまりにも廣汎である。しかしながら、それだけに、ずばぬけた隨筆家が少いといふことは逆説ではなく事實である。此の點に於いて、本集の編纂に就いて最も顧慮を必要とする、如何なる作家の如何なる作品を選び收めるかの疑問には、自ら明解があつた。なほ、本集が「明治大正の文學を文學史的見地より體系づける」ことを目的する『現代日本文學全集』の一分冊たることは、編纂方法に更

したところの、かの文學史の所謂美文、寫生文、紀行文とは何か？
明治十年代末より二十年代の初頭へかけて我國のあらゆる狀勢が、ひたむきに歐化主義的傾向に趨かうとした際、その反動として起つた國粹保存運動は、藝文の範圍に於いては、必然、國文學、漢文學の復興となつて、芭蕉、西鶴、近松、馬琴等の近世文學を顧望するに至り、ここに幾久しき世代に涉つて圓熟に圓熟を重ね來つた古典語を表現のメデイアムとし、盛るに當代の思想を以てする一スタイルの出現となつた。それは散文詩でもあり、隨筆風のエッセイでもあり、世俗はこれをいつしか「美文」なる稱呼をもつて稱呼するに至つた。蓋しその先驅者大和田建樹、落合直文は言はずもあれ、またその陣頭に最も鮮明なる旗幟を顯した戰士大町桂月、鹽井雨江、武島羽衣の名は、忘るべからざるものであらう。而してこのスタイルを深き西歐文學の素養を以て取扱つた人々はこの雑誌「文學界」の同人、平田亮木、馬場孤蝶、戸川秋骨等である。

寫生文は、三十年代に至つて子規居士を中心として起つた文章上の新運動である。「作者若し須磨に在らば讀者も共に須磨に在るが如く感じ、作者若し眼前に美人を見居らば讀者も亦眼前に美人を見居るが如く感ぜしめるといふ居士の言葉こそ、この文派の主生命をなすもの。河東碧梧桐、篠原温亭、阪本四方太、寒川鼠骨等のものした小説、紀行、隨筆等々は、こゝにその文脈出發が置かれてある。
自然を目的格とする紀行文に於いても、當代新興の美文、寫生文は、これに一つの鋭い衝擊を與へて多々の紀行文家を輩出せしめた。遅塚麗水、柳田國男、小島島水、吉江孤雁等、いづれもあまりに有名である。而して『不二山に登る記』『不二の高根』を讀みて『ヨセミテ谷と上高地』『成都道中記』と至る時、時代と紀行文の交錯をもうかひ知ることが出来る。
志賀重昂は一つの變種である。それだけに瞻目すべきものがある。『日本風景論』が當代に於て劃期的賣行を示した所以は、彼が「科學と美」との調和を最も意とした點にあらう。
こゝに集められた十七作家、五十餘篇の文章は、故人以外はすべて作者その人の選によつたものである。
附録とした島崎藤村の『春』『嵐』二篇は、解説すべくあまりに有名である。

本集が特に明治二十年代よりその末期に互る所謂美文寫生文的隨筆、並びにそれ等の働きかけによつて特殊なる發達を遂げた當代の紀行文に重點を置き、これに、變遷の過程を示すべく新しきものを加へた意圖は上述の理由によつて了解され、Aも高名な隨筆家だ、Bも高名な紀行文家である、それが何故に本集には逸せられたか、といふ或ひは起るかも知れぬ一應の疑問も、結局一應にしてしまふであらう。
さて、隨筆のうちで特殊なる形式を以て發達

したところの、かの文學史の所謂美文、寫生文、紀行文とは何か？
明治十年代末より二十年代の初頭へかけて我國のあらゆる狀勢が、ひたむきに歐化主義的傾向に趨かうとした際、その反動として起つた國粹保存運動は、藝文の範圍に於いては、必然、國文學、漢文學の復興となつて、芭蕉、西鶴、近松、馬琴等の近世文學を顧望するに至り、ここに幾久しき世代に涉つて圓熟に圓熟を重ね來つた古典語を表現のメデイアムとし、盛るに當代の思想を以てする一スタイルの出現となつた。それは散文詩でもあり、隨筆風のエッセイでもあり、世俗はこれをいつしか「美文」なる稱呼をもつて稱呼するに至つた。蓋しその先驅者大和田建樹、落合直文は言はずもあれ、またその陣頭に最も鮮明なる旗幟を顯した戰士大町桂月、鹽井雨江、武島羽衣の名は、忘るべからざるものであらう。而してこのスタイルを深き西歐文學の素養を以て取扱つた人々はこの雑誌「文學界」の同人、平田亮木、馬場孤蝶、戸川秋骨等である。

寫生文は、三十年代に至つて子規居士を中心として起つた文章上の新運動である。「作者若し須磨に在らば讀者も共に須磨に在るが如く感じ、作者若し眼前に美人を見居らば讀者も亦眼前に美人を見居るが如く感ぜしめるといふ居士の言葉こそ、この文派の主生命をなすもの。河東碧梧桐、篠原温亭、阪本四方太、寒川鼠骨等のものした小説、紀行、隨筆等々は、こゝにその文脈出發が置かれてある。
自然を目的格とする紀行文に於いても、當代新興の美文、寫生文は、これに一つの鋭い衝擊を與へて多々の紀行文家を輩出せしめた。遅塚麗水、柳田國男、小島島水、吉江孤雁等、いづれもあまりに有名である。而して『不二山に登る記』『不二の高根』を讀みて『ヨセミテ谷と上高地』『成都道中記』と至る時、時代と紀行文の交錯をもうかひ知ることが出来る。
志賀重昂は一つの變種である。それだけに瞻目すべきものがある。『日本風景論』が當代に於て劃期的賣行を示した所以は、彼が「科學と美」との調和を最も意とした點にあらう。
こゝに集められた十七作家、五十餘篇の文章は、故人以外はすべて作者その人の選によつたものである。
附録とした島崎藤村の『春』『嵐』二篇は、解説すべくあまりに有名である。

千^{せん}

里^り

の

春^{はる}

大^{ひな}

和^わ

め

ぐ

り

大
和
田
建
樹

大和めぐり

ふみの上にては明葉親しうすれど。足いまだ其地をふまねば。我ながらはづかしく物足らぬ心地せしを。今年は夏に暇をえたれば。思ひたちて大和めぐりをせんとするなり。をりよく道づれもあれば。まづ大阪より和歌山に遊び。それより大和に入らんとて。七月廿三日の朝。新橋より汽車にていでたつ。雨をやみなくてうるさき物から。いと涼し。たゞものさびしくて幾ところもすぎぬ。舞坂を出でて入海の中道を走りゆくに。暮れそめたれば。雨はけむり渡りて一面の白きなかを。黒き鳥の處々に群がり飛ぶなど。あはれ此景色を家なる人にと。思へどかひなし。かくてふけそむる頃名古屋につきぬ。新屋橋といふを渡りて川村屋といふに宿る。とかくして枕につきたるは一時過なり。廿四日。雨やまず。一番汽車にてたつ。道に岐阜のあたりをすぐるくみるに。田も畑も水にひたされて。たゞ湖水の上をゆくに似たり。造化の恨は。なぞて此地にのみかたよれるやらん。京都につきて。駄屋町の押小路上る處に

て。澤文といふにやどる。けふは祇園祭なりといへば。それ見んとて。四條わたりまでゆきたるに。山は既に通りぬとて。たゞ御旅宿に神輿のみおはす。残りをしけれどせんかたなきに。雨は篠を亂していや降りに降れば。袖もすそもぬれとほりぬ。人々とひくらして夜ふかく宿りにかへる。廿五日。雨少しやむ。二番汽車にて大阪につけば。加藤延治氏は早くも停車場にあり。車にて其家につく。酒いでねんごろに逗留せよとすゝめらるれど。明日は同行の井上はるえ子と和歌山に送らんの約あれば。旅行の終りに。京大阪に又たちかへるべきよしをのぶ。けふは天満祭なるが。降りつゞく雨に水高ければ。舟ならで陸にて神輿の御わたりあるべしといへば。晝過ぎて難波橋を渡りて。西へくといゆき橋一つわたれば。今ぞ一むれのねり物わたる。侍鳥帽子に梅の花をかざし。狩衣のいでたちなる女。傘をさし車にのりつゞけて。四五人もゆく。そのみにてあとは。まてどもく

みえず。大路には暇なく篝火焚きたてゝ。黒煙そらを染むるばかりなり。さらでも少し日光のみえてあつきにとて。見さしてかへる。あすの地岡などしらべあひて。物語しつゝ。深更に及びたれば夢路にいる。廿六日。はれたり。ゆるやかに大阪をたちて。夕方河内山につく。はるえ子と共に其家に至れば。母人まちむかへていざといはるゝうちに。二人の弟は。姉上にお歸りよと。其あたりとしかこみつゝ。喜びおもてにあらはれたる。よそめにも心晴れゆく圓居なりけり。今宵は此家にやどる。廿七日。けふも日よし。はるえ子の兄人に案内せられて。一家の人々と紀三井寺にのぼる。寺のさまきらくしからねどさびわたりて。木立すゞしく。麓邊の浦かく見おろされたる。まづうれし。寺山の麓より舟にのりて。和歌の浦の拜殿といふ處までゆく。こゝより見かへれば。名草山縁ふかくゑみたてゐるに。かの寺の壁白くあぶがれたる。又更に尊くなつたし。麓邊のあしべ屋といふにて。物くひなどして久しく涼む。麓邊をさしてとよみけん鳥はと問へば。維新前までは殺生禁断にて。あまたおりゐたりに。今は影みることたえはてぬ。といふ

こそあさましかれ。されど見と見る海山。みな古人の如く。半日の身はいつしか代々の撰集にもいりたるこゝちす。玉津島もをがみはてて。東照宮などの名所々々をめぐり。濱邊にいづ。此あたり松おほし。

またもこんな葉の蘆の浦風に

靡うちそふるまつの下かげ

かの蘆邊のあたりにおふるをば。かた葉のあしとぞいふなる。漁夫あまた軒をつらねて。けふのえもの賣りかふにや。かしがましくつどひのしる中をぬけて。潮あむまうける家につきぬ。前は海にて。淡路島したしく影をかはし。蘆なく松なく。けしき又あらたなれば。盃のかずもいつしか重なりぬ。幾度となく波とすまひ戯れて。歸り來ぬれば夜はさきがけしに家あり。

廿八日。けふも目よし。渥美氏をひとて。もと白樫氏にゆく。けふより此家にやどらんとするなり。あるじの翁は。まづ和歌山城にのぼるべしといはるゝに。随ひゆく。

まだそめぬ蘆の色さへあはれにて

夏も身にしむ城のまつかげ

あはれ此地に入りけるをとつひ。青田のすゑにほのみえつゝ。はるえ子のゑがほをむかへつ

る白壁は。是なりけるよ。天守のいち高き樓にのぼりはつれば。和歌山城下をはじめ近きあたりの村々山々まで。一幅の畫圖に集まる。白樫氏にかへりて書過ぐれば。また和歌の浦に汐あみにともなはれゆく。

へだてなき遊びがたきとなりにけり

きのふはよその和歌の浦波

廿九日。けふも。朝涼しきほどにて。日前國懸の二宮にまうづ。人氣にしまぬ宮居おくぶかし。

驚のこゑそらにきこえて日の影も

神さびわたる森の竹むら

夕方は。城の麓なる岡東館といふに。この地の人々よりまねかれてゆく。集まれるは八九人にて。うちとけたるまとゐに。夏さへ旅さへわすれはてつ。

三十日。けふも。渥美氏の案内にて。主客三人うちつれて。加太町といふにゆく。町を離れて西の方三里ばかりの海邊なり。栗島神社もここにたゞせり。いでいる船のきまなどみつゝ。近くは昔が島。遠くは淡路島に向ひて。心しづかに物語しつゝすむ。例のくせとて潮もあみつ。夕日やう／＼横になりて。波に黄金の龍をゑがくなど。なごりをしからぬものなきを。

あはれ釣人の生涯ならまししかば。

こよひは渥美氏に宿りて。語りふがす。あすは高野にのぼらんとすれば。夢まづ白雲のうちに入りて。まだきにすぎし假寐なりけり。

卅一日。けふも。夜をこめていで行く道すがら。白樫氏より途中の用意にとて。暑氣拂やラムネやと恵まれたること。井上氏の草鞋など心つけて贈られしこと。渥美氏の夜もねずて今朝の飯など取りまうけ。心盡してめぐまれしことを思へば。なにかたへとん。

けふわけん高野のおくの雲よりも
ふかきは人のなきけなりけり。
わすれじよ友のなきけにおくられて
旅だつたけさのあけぼののみち
わたし一つ渡りて。紀の川ぞひをのぼる。畫に近き頃。又川を渡りかへして。九度山村につく。こゝより四里ばかりの山道を。駕籠にて不動坂といふをさしつゝ。けはしき道をつられゆく。其苦しみを慰めんとや。水音松風。さては秋の花の處々にほころびたるありて。絶えず山路に送り迎ふる神の恵のいと深きよ。坂やうやうはてゝ。女人堂の前に駕とまる。此あたり谷間には。いく尋いく丈ともしられぬ杉檜など。ふか／＼と立ちなみて。いと物すごく。初

めて心は高野めきぬ。

渥美氏の紹介にて。東根院といふ寺にやどりは借る。こゝに名刺を通じ置きて。案内する小童こひて處々みめぐるに。立ちならべる寺々は皆樟皮ぶきて。清らかなること浮世の物ならず。されど。先年の火にてなから焼けうせぬとて。今猶その名残の枯木石ずるなどの残れるかれこれみゆ。あたゝゝ地をといとくちをし。玉川と教へるゝ小川を渡りて。奥へゝといれば。右も左も五輪やうの石碑。大きな小きき。さまゝに市をなして立てり。これなん昔より貴賤尊卑の別なく。かたみの骨を埋めて冥福をとぶらふ墓なりける。此あたりすべて女人堂のあたりの如く。木立物ふりて夕日梢にうすし。

雲に在る杉より上にひびくなり

たかのおくの日ぐらしの聲

墓を過ぐれば骨堂といふあり。六角のさゝやかなる堂を戸のひまよりうちのぞけば。ほの暗きに白骨るゝたり。あはれ老少不定の世の習と。観ぜらるゝも此あたりなるべし。奥の院の前には燈籠堂とて。數萬のともしびを佛にたむくる所あり。こゝかしこ見はてゝ。もとの道にいで彼寺に歸れば。僧出で迎へて懇にもて

なすも。友の恵ぞかし。更けゆくまゝに。『あらしやのりを』と詠はまほしき夜のさまなるに。窓をひらけば。影青き星の木のまにきらめくなど。

八月一日。朝霧ふかし。

名もしらぬ花をちこちにみえそめて

あさぎりはるゝ寺のなかみち

僧きて別れをつげつゝ。けふはみづからがと思ひつるを。にはかに宗務いできたればとて。

昨日の童づけて案内せさす。青巖寺の幽寂なる。金堂の莊嚴なる。みめぐりて。丹生明神の社にまうづ。樟皮の軒ばをまばらに見せて。楓の青葉しげりあひたり。

きながらのぬきやたむけん心あらば

露にさきだて森ののみぢ葉

をとこべしのみあまた。寺のかきねをめぐりて咲きたるも。ところからをかし。

をみなべしにほはぬ山の秋風に

ところえがほの花のいろかな

これは三鈴の松。かれは西行櫻など。さしめすをきゝさしつゝ。又もとの女人堂にい

づ。こゝより昨日の智龍にてかゝれゆくに。露まだ乾かぬ草葉の上に。日影美しうこぼれかゝ

るなど。いと面白ければ。山路の苦しさもまだ

おぼえず。

妹とわがうるゝ垣根のをとこべし

つぼみを乳子や今朝見つくらん

くだるにつれて。木蔭すくなく日高くなり

て。寺にておきいでし今朝の心地は。いづくへ

からせつらん。あななるし此駕籠の小きさよ。

頭は上につかへてゆるゝまゝに打たれ。膝は折

りたるまゝにすゑなほすこともかなはず。うち

みじろげば底もぬくべき心地するはと言へば。

そは駕籠の罪ならず。旦那のふとりすぎ給へる

故ぞとて。かごかきつばやく。九度山に下りつ

きたるは眞晝なりき。昨日の道を用つたひし

て。火ともし頃和歌山に歸りぬ。白樫氏にてか

の山の物語するほどに。火影もねむげになりぬ

るは。夜のふけたるにか。

二日。けふも目よし。白樫翁は常に綱もて魚

とる事をたしめるゝが。今日は其えものまゐら

せん。あとより來ませとて。いでゆかれぬ。晝を

あひづに。息女などと打ちつれだち。荒濱と

いふをさして陸地をゆく。紐の川に海にいづる

所なり。道に吹上寺によりて。本居大平翁の墓

に詣づ。昔はさはなかりしときけど。かれんぐ

の草どもおひこりて蜘蛛の絲の處得顔なるは。

はらひに來べきかたみのをしへ子たちも。のこ

りずくなくなりぬるならんと。あはれなり。

春ならばふきあげでらの庭の草

貝ひろふ子も来てふまゝしを

翁は。舟に鮮やかなる魚と。ぬれたる網とを

のせて。酒薬物と共に待ちゐたり。和歌山人の

汐あみに多くつどふは。こゝなりときゝしもし

るく。沖に向ひたるかたの渚には。老若男女

ひまもなし。舟こぞりて衣とききてゝ海にい

る。これを東國にたとふれば。かの和歌の浦は

岩間にすがりて波と遊ぶ所なれば。大磯に似た

るべし。この荒濱は幾町も遠淺になりて。砂

とすまひ流れゆくさま。鎌倉の海にや似たるべ

き。時の間にあさりやらの貝人々の手に餘れ

ば。さはとて舟より桶とりきたるに。これにも

満ちぬ。あはれ汐干狩の頃にあひて。家人子ど

もなど携へこば。いかに楽しき遊びならまし。

歸りは舟にて。涼みの火影を漕ぎ分けつゝ。和

歌川を来て。何がし橋のもとにつきぬ。

三日。けふも晴れぬ。井上はるえ子の案内に

て。四五人伴ひつれて鳴鴻といふに遊ぶ。紀の

川を渡りて。やゝ山に在る所に寺あり。こゝを

少し奥にいれば。其瀧なり。流れ潔くほとばし

りて。木陰多く。外に訪ひ来る人もなければ。

岩をむしるに涼みて。寺に歸れば。この庭に

も小瀧ありて面白く線を練りかけたり。本堂の
はしをかりて。わりごなどひらきつゝみやれ
ば。瀧のあたりに楓三もと四もとたてるが。
色づきそめたり。

たきの音になつてもわすれて山寺の

庭のもみぢ葉まだきそめけん

といへば。六浦ならぬに。こゝにも紅葉を止

めてはと笑ふもあり。鴛相卿ならねばなど戯

れて。よきほどに白樺氏に歸る。今宵は歌よみ

遊ばんとて人々集ふ。題をさぐりなして。夜

中過までうち興ず。其人々はあるじの翁を初

めとして。七八人もやありつらん。

四日。なほつゞけり。近きほどに立たんとな

れば。名残にとて。また和歌の浦に遊ぶ。ます

ますつきせず。

わかれても夢路にかよへいにしへの

あとなつかしき和歌の浦波

五日。けふも。わか山をさること東南のか

た。五里許の處に夜茂といふあり。このわた

りに。不動の瀧また長保寺などの見所あるを。

ゆきて見ずやと人の勸むれば。曉がたより井上

渥美白樺などの人々と車にて出でたつ。紀三井

寺のふもとをすぎ行くに。今日は千日まゐりと

て。市人も田舎人も。黄なる藍なる日傘さしつ

づけてゆきかふにあふ。猶今やうならぬこゝち

す。心晴れたる海原を右にひかへて。いと早

く鹽津といふ港につきぬ。こゝには渥美ちよ子

の敦へたる生徒ありて。其父は質朴なる老人な

るが。よろこび迎へて。懇に案内せんとす。加

茂はこゝより一里許とか。かのきしつる寺は一

條天皇の勅願所なるに。もとの和歌山城主

の代々の御墓もあれば。いかめしきなごり見え

ていと尊く。物しづかにて世ばなれたり。瀧は

裏見とて。岩の上より幅廣く落つるを。其うら

に道ありてぬけとほりつゝ見るなり。日光のお

もかげをうつせる心にやあらん。ゆきゆく道の

ほとりには蜜柑の木ずる。緑を深めて。黄に

紅にひかり満つらん秋の色さ。思はせたり。

かへればかの老人きぬの裾まくり上げつゝ。菓

子よ飯よと立ち走りつゝもてなしふるまふ。夕

風涼しくなれる頃老人に別れて。こゝより和歌

山に通ふ汽船にのる。和歌の浦名草の山。よび

答へつゝゑまひたてる中を。一はしり行けば。

馴れつる城は猶顔かくさで。夕雲の外に我をむ

かへつ。

六日。なほ晴れわたれり。あすはたゝんとす

れば。別れを告げに我もゆけば。人も来る。夕

方まで。白樺氏にて懇なる別れの盃をうけ

て。それより井上氏にゆく。わが旅の具はこの井上氏にあづけてあれば。こゝより立たんとするなり。白樫氏は廣瀬とて、和歌川の西にあたり。井上氏は新中通とて、川より東なれば。橋一つ渡りゆくに。川下近く名草山見たさるゝも。明日はよその空になりなと思へば。たゞならず。井上氏にては酒出だされて。物がたりなどするほどに。猶いとまごひに來る人ありて。嬉しく悲しく夜ふけにけり。

七日。日よし。明けぬうちにと思ひしを。とかく立ちおくるゝは旅のならひぞかし。白樫温美井上三氏。父子兄弟車を連ねてはるかに送りく。いつかまたとて人々しめりがちなり。吾身は初めて來つる旅人なるを。夜に日に心を盡していつくしみもてなされしさへあるに。かくも別れも惜まるゝよと。胸ふたがりて詞も出でず。車をおりて立ちたる人は遠くなりぬ。日の影きら／＼と城のやぐらにのぼるも残り多し。

すみなれし方はそなたとみかへれば
なみだにかすむ和歌山の城

なほゆく／＼。

人々の深きなけを身ひとつに

あつめてしほる我たもとな

今日はながく紀の川ぞひに。さきの日と同じ

高野の道をゆく。さるははじめよりかくときだめなば。高野もついでにすべかりしを。熊野より伊勢路にかゝりて大和に入らんとせしかば。また和歌山に立ち歸りたるなり。しかるに熊野のかたは此旅行には日數足らずなりたれば。ふたゝび此道より吉野をさすこととなりて思へば。おぞましき二度の川づたひなるかな。妙寺村といふより高野道にわかれて。なほ川上へとゆく。橋本を過ぎ落合川といふを渡れば。大和なり。水の音の聲。聞くもの見るもの。何となくなつかしきは。國の名にひかれたる心なるべし。五條などすぎて六田に出づれば。渡しあり。同じ紀の川ながら吉野川になれるぞうれしき。かなたより漕ぎ寄する舟に。桔梗女郎花など折り持たる老女を乗せくるは。吉野の秋風をまづ見せんとての山船のしわざかと我ながらものぐるほし。渡りはてゝ。けはしき坂路をめぐりのれば。うちはれたる處に茶屋あり。水こひつゝ問へば。こゝぞ一日千本なりける。見ゆるかぎりはと。八田翁のよまれしも。此あたりならん。すゞしき陰は。いづれもきのふの花なりけり。

なほいかに花の雪ちるおぼろよの

その下かげの旅寝なりせば

吉野町にいらて。さこやといふに宿る。奥深き谷に臨める家にて。碧をたゝむ山々の色まどに移り。みおろせば。蚊遣くゆらず賤が屋のなりはひも。一目にあつまる。

來てみればまじる浮世の塵もなし

よしののやまの夏の夕暮

さらでも山風に親しくなれる夜を。月さへ訪ひ來て。寐さめの枕なぐさむることよ。

八日。日よし。案内者に促ひて仁王門を入

り。まづ藏王堂。それより吉水院にまうづ。こ

れは後醍醐天皇のおはしましける所にて。其御

靈を祭りたれば。心とめて拜み奉る。勝手

の社。水分の社。金峯の社など拜みめぐる。

何れも木立ふかく神さびわたれりとは今さらな

るべし。金峯の社にて社務所めきたる處にた

ちより。西行庵の事など問へば。上人自作の

像は。春の頃参詣人多きをりは番人つけて庵に

安置すれど。其外はこゝにすゑおきて守りまゐ

らすなりとて。奥の間にしるべす。近くより

て拜すれば。忍辱のうちに柔和のまなざし人を

射るこゝちして。生きたる其人に接するおもひ

あり。またやゝのぼりて。草深き野路を薄高

堂かきわけ／＼暫しゆけば。音たてゝ落ち來る

水あり。上人の常にむすびつる苔清水はこれ

なりといふ。

あな慇懃この昔水をむすびあげて

筆ぬらしけん人のおもかけ

少し廣やかなる所に庵ありて。昔のさま

なりといへど。近頃たてたる物なれば。寧ろな

くもがなと思はるゝ。元の道にいでて下り

下りて谷に入り。木ぶかき處をあへぎくゆけ

ば。辛うじて寺のやねみゆ。如意堂はこれぞ

かし。門をいり堂を右に見て。石の階を昇れ

ば。後醍醐天皇の陵なり。松椎など玉垣のう

ち暗く枝をかはして。立ち去りがたき御前なり

けり。

古寺のかけひの清水音すみて

みさぐきさむし秋の初風

僧に案内をひて。寶藏にいり。かへらじとの

屏や何やと。古の名残の品々みあさるもなつ

かし。案内者にいさといはれて。細道づたひし

つゝ宿りに歸れば。日もなかなばになりぬ。

駕籠にてこゝをたつ。櫻の渡しといふをわた

りて。上市村にいで。さかしき山路をゆくに。

女郎花撫子。岸の左右にさききほひて。はねか

へり袂にふるゝなど。くるしきうちにもおもし

ろし。月立峠といふにかゝる頃。一陣の風を

さきにたてゝ。夕立篠をたばねて来る。假初な

る茶店に雨やどりして。あな涼しいふ間もな
く。はや日影あかき空となりたれば。道いそが
せて多武峯をさす。

あきつ飛ぶみちの撫子露みえて

なごりしづけき夕立の雨

四軒小屋といふは。眺望いとよき處にて。

あすゆかん道のくまぐ目の前に見おろさる。

何れの山何れの岡かおろかなるべき。夕ぐれ近

くつきて花中屋といふに宿る。夜にいれば冷や

かなり。宿のあるじはもと此寺の僧にて。多武

峯縁起の畫巻物もちたりときけば。今宵借りえ

て。もしびのもとにて心しづかにひらきみ

る。

九日。けふも。涼しき内に多武峯神社にま

うづ。葉櫻の梢のひまに。朱の堂塔の朝日に

輝くかうくしき。廊を右の方に登れば。寶

物を置きならべたる室あり。中にも能の面五つ

六つなど。心癖とて暫しは足を留めたり。社

をいでて長谷の道にかゝる。焼くるが如き山ぞ

ひの道を來て。砂にまみれゆくほどにつきぬ。

町を左に折るれば下界をはなれて寺の屋根高く

あぶがる。あはれ世々の文人歌人に導かれて。

今日こそこゝに來にけれと。まづうれし。枕の

草紙の貝の聲など。世をへだてたるこゝちもせ

ず。御堂にまうでて僧にしろるべこひて。本尊を
拜みなす。

わが身さへ仰きびても見ゆるかな

松風かをはせのふるてら

いつかはとおもひわたりし初瀬山

のほるもしるべ世々の言葉の

初瀬川はさゝやかに麓を流れたり。二本の杉

は何れとも人をしへず。

寒すぎて明日までの車を雇ひ。この町をた

つ。

暫しゆけば左の方に小さき流れあるを佐野と

をしふ。三輪近き處なれば袖うち拂ふの舊蹟な

るべし。三輪町を過ぎて鳥居の前に出づ。こゝ

より車を下りて。奥ふかく杉の中道を幾町も

いりて。御社に至る。白木に楡皮の御あらかも

いとさびたるに。金燈籠を軒のつまにかけ連ね

たるなど。昔おぼゆる廣前ぞかし。参詣の人も

われならではなく。いとしづけし。石の階を

下れば。右の方に杉の枯木のうつぼなるに。し

めなはめぐらしたるは。是やしろしのと。見る

ものごとになつかしからぬはなし。

おもかげの夢も今宵はかはらまし

けふぞわけつる三輪の村

昨日遙かに。それかこれかと心にかけつる三

つ山も。ちかくなりぬ。前なるは耳梨。中なるは畝傍。左のは香具山。何れも笠など伏せたらんやうに見ゆる中に。畝傍は舉しげく木々おひたれば。兜などにやたとふべき。いと陸ましげに。昔の怨も浅からざるべし。物しらぬ人も此地にくれば。歴史讀みたうなると聞くに。ましてわれは童の頃より好みたる道とて。親しう心にゆきかひたる土地なれば。うれしき餘りて夢のやうなり。道を折れくで。畝傍山の麓にいづ。右の方に玉垣いかめしうしわたせる。陵は。是ぞ。楓原の宮に。天の下しろしめし。御事のよ。少し入りて拜み奉る。奥は只廣々と木々の緑のみゆるのみ。あゝ天つ日と畝傍山と。此御はかの土と。二千五百年前の事を語らば答ふべきか。

御とらしにふれししらべか玉だすき
うねびの山のまつかぜの聲
北の方に少し離れて。綏靖天皇のも立たせり。前のよりはめぐりいと小さく。玉垣の中も現はに伺ひ奉らる。松櫻など立ちならべる岡なり。日高く當麻寺につく。こゝは役の行者の開山とて。かの中將姫の蓮の絲もて織りたるまんだらを。本尊とすといへば。いとうるさきまで其姫の事どもときほこれり。されば幽寂

清淨の地にて。二つの塔の山際にけむり殘れなど。浮世の人に見せまほし。寺の前なる玉屋といふにやどる。夕立して涼しく暮れる。十日。ときくくもる。達磨寺を経て。龍田に九時まへにつく。龍田川といふいさけき川。村の入口を流れて。楓の木あまた岸に立てり。されど川も御社もまことにはあらで。誠のはなほ五十町も山深く入りたる處にありといふ。けふ詣つる御社は拜殿とぞ申すべき。楓の木影に。鷄むれ居て遊ぶなど。さはいへど神さびたり。來ん月は龍田の能をせんと望あれば。殊に心こめてをがみ奉る。

たゞひと日われにかきなん龍田姫
紅葉がさねの舞のたもとを
少しゆけば法隆寺なり。伽藍の莊嚴。寶物の富麗。天下にならびなしと案内の僧の説きほこりたる。よしやそれまでならずとも遠からざるべし。金堂の壁に曼徴といふ百濟畫師のかけりしなど。眞偽はしらず。其中の二三にやとぞ思ふ。

郡山をいでて垂仁天皇の陵にまうづ。此岡は木立しげからず高からずして。池水にきよく影をうつせるも。さるかに尊し。田道間守の墓もこゝにありといふを。あとにて聞きつ

るこそくやしけれ。菅原村の天満宮また西大寺などめぐりて。晝過ぐる頃奈良の町にいりぬ。猿澤の池にのぞめる魚屋といふにやどりは定めたり。今日の暑さは格別なる上に道いとあしく。ともすれば車かたむきがちに危き所多く。かれこれの苦しみにて。いつよりも扱れた

り。
一ゆあみして案内者を雇ひて見物にゆく。まづ池の岸に立ちて。あれは衣かけ柳とてむかし采女の何々と説き出だしたるが。やがて此地の形『の文字』になりたるをもて。『猿澤の』といふ歌ありといへるにぞ。かゝる時こそほい笑みあふ友ありせばと。戀しくなりぬる。ゆきゆきて春日明神の一の鳥居に出づ。こゝよりは木蔭ひまなく。左の方はやゝ廣き草村なるに。あれみよといふ方を見やれば。草葉の末より角やうの物みゆ。鹿なるもうれし。すべて暑き頃は隠れゐて目を避くるなりとぞ。道の傍に茶店ありて。鹿にはまする卯の花團子を賣るあたりに。二つ三つもむれゐて客まじ顔なり。取りて與ふればなれくしくより來て食ふ。あはれ家なるちごにみせましかばと。その喜ぶらんと影さへ思ひやられて。一人見ることのさびしさよ。二の鳥居よりは木かげますく生ひ増さ

りて縁涼しきに、宮居あからに立ち續きたる。畫か夢か。はたうつゝか。神樂殿の奥には。女の童なるべし。白衣に緋の袴なるが。花をかざしたるやうの頭つきして二人すきかげにみえたるは。昔人の筆すきにもいりぬべき様なり。手向山も拜みはてゝ三笠山の麓にかゝる頃。俄に神鳴りて夕立さつと來たり。

旅衣ぬれてうれしとりあへぬ

三笠の山のゆふだちのあめ

雨やどりにとて立ちいる家は。三條の小鍛冶とて。刀劍あまた並べて人待ち顔なるは。良將を待たでも賣らんとするべし。是も能にて親しうする中なれば。と笑ひながら小刀一つ求めていづ。世は泰平になりけるぞや。雨も名残になりぬ。二月堂三月堂などを右にみて東大寺の大佛に至る。昔の人のと今更いふまでもなし。顔の長さ一丈六尺ぞかし。堂の内に博物館の設けあれば。是もめぐりて。興福寺南圓堂なども残さず。宿りに歸ればたそがれ頃となりけり。暮れはてゝ欄干によれば。涼みなるべし。池のかなたは一面のともし火となりぬ。其影水に長く落ちて龍となり流星となるなど。いと興あり。鐘の聲するも面白きに。雲やうく薄らきて月姿をみす。

もろこしに昔の人のながめけん

これや三笠の山のはのつき

神垣の杉の木かげにふす鹿の

すがたもうつるそらの色かな

十一日。はれたり。やどりを立ちて町を北に出で離れ。西に折れて奈保山の。元明元正二御代の陵にまうづ。

もゝしきにつぐく夢路のあともなし

いな葉をわたるなほの山風

其れより立ち歸りて。東大寺の正倉院に至る。今年此御庫なる御物拜觀を許されたれば。かならずと思ひしを。今朝は夕立の名残の空にて心にかゝりつるに。さきの陵拜みはつる頃よりやうく日出でて。なごりなくはれたるぞうれしき。大佛の門前に車を乗りすてゝ。院の入口に至れば門はまだひらかず。こゝを守る巡査に問へば。今日は曇りたれば御庫はまだあかねど。既に晴れたれば掛りの人にしか申すべし。こちきませとて。くゞり戸おしあけていりぬ。これにしたがひゆけば。掛りの人いでき給仕に茶などはこぼせつゝ。今少し待ち給へといふ。さればあくべきにこそと。天の恵みを思へばいとうれし。かくてこちへといふにつきて御庫の東側の梯子より昇る。掛りの人こゝ

にまちゐてねんごろに指し示さるゝを。自ら一人なればくはしく拜觀するも。一つは掛りの人の親切なるに由るなり。そもく此正倉院と申すは。聖武天皇の御冥福を祈らせ給はんとて。其御遺愛の御物を此寺にをさめさせ給ふによりて立ちたる御倉なり。其のち絶えず勅封の處となりたれば。昔のまゝに委かふべき由もなし。されば畏くもその大御手に觸れ奉りたるものなるは申すまでもなく。御冠。御袈裟。さては御杖。御如意。御旗やうの物まで。見奉るまゝに。御口に御念誦となへさせ給ひし御おもゝちまで。恐れ多くも胸に浮びて。かの大佛殿の綱ひき給ひし時にあの御香やめされし。三寶の奴とぬかづき給ひし時のはこの御装束なりけん。など忍び奉られて。暫しは今の世人の心地もせず。すべて精巧華美なること驚かるゝといふも愚なり。此處をいでて聖武天皇とその後の宮との佐保山の陵に詣づ。さきには其の御手に觸れたる御かたみを拜し。今は此土となり給ひし御跡にまうでて。かへすゝも忍び奉るは千年の昔なりけり。

佐保の山草葉しづけしふる寺の

かねに千年のこゑを残して

それより西を指して法華寺といふを過ぎ。平

城天皇の陵にまうづ。たが手向けけん。蓮の花の結々なる玉垣の外にたてり。成務孝讓二御代の陵にまうづ。このみきぎは道一つ隔てゝ。何れも小池の上にたゝして似たる様なれば。世には鶴龜の陵などと稱奉るとぞ。神功皇后のは小高き岡をのぼりたる上にあり。玉垣の外には池ありて。村の童ども泳ぎゐたり。外のよりは木だちなどふかふかとしていけだかく。御功にもおのづから通ひたるかと思ひ奉れば。何か歌一つと苦しみたれど終に得ず。こゝを下りて砂石のいとあしき道をまがりうねりて。辛うじて一時も下る頃にやありけん。木津町に出れば山城になりぬ。龜岡氏によるに。必ず一泊をと留められて。今宵は留まることに定む。木津川に向ひて遠くは愛宕山も見やられ。又うしろには三笠山も顧みられたり。酒出でて大酔になりぬ。疲れたるべければとて下婢枕持てきぬ。あはれ一睡のまに何をか見まし。

すぎきつる跡を都になしてみん

夢ふきおくれ木津のかはかせ

十二日。くもる。今日は立たんとしつるに。あるじ舟のまうけしあればいざといふ。すゞしきうちに京までと思ひしをといへど。それ

はひるからにてよしとて。許さんけしきなければ。伴はれ行く。あの山はなに。そのこなたはいづく。指し示さるゝは名所ならぬもなければ。畫のうちを漕ぎ行く心地す。あるじは魚ねらひつゝ網を腕にして舳先にあり。舟人は眼をこらし縛をあやつりつゝ後へにあり。其中央に眠るが如く憂ふるが如きおもゝちしたるは。歌おもひする客なりけり。一水さつとほとばしりければ。銀の鱗すでに舟に躍る。忽にして桶に遊び。忽にして舳に上り。忽にして桶に入れば。酒ははや九分になりぬ。日を望めば。身は遂にあるじの手内に落ちてけるかな。家に歸りて欄干にせなかおしつゝ。うち見やれば。

うちむかふ故郷びとのおもかげを

みそらにゑがく雲のいろかな

あすはわがたもとの露となりぬべし

あたごの山の夕暮のくも

酒冷え物語果てゝ。あるじは階をおりぬ。

月は峯をや離れぬ。

三笠山つきにむかしのあと問へば

あらしにひびく古てらの鐘

十三日。てる。月潮の梅にはかならず。との詞をあとしして急ぎ立つ。井手村といふに出づ

れば。玉水といふ名はあれど。花の露そふとよみけん流も見えず。河づたひを來て伏見の里に渡り。いなり大佛などを右に見つゝ。三條小橋の萬屋といふにつく。十時に少し遅かりけん。まづとりあへず。護王神社の平野氏をとふ。あるじの曰く。猪熊翁は君の此地につかるゝを待ちてあり。それにもしらせん。さるにても物語せんは水邊こそよけれ。いざといはるゝに。あるじをさきに立てゝ。何某橋のもとなる何某亭に登る。稍茂りて日影遠く。川風よくいるるを肴にて。盃一つふたつ廻らすほどに。猪熊翁來れり。あふより肝膽を顯はして。文を論じ歌を語り。面白き閑居となりぬ。翁は京都師範學校の教官ぞかし。

たちよれば夏も残らずなりにけり

おなじながれの加茂川のみづ

と記して見すれば。おきな。

老いぬともおなじながれの末かけて

と返しするゝ。身は實盛となりてもとて。大

笑となりたればまた。

篠原のむかしのあともかたらはん

あやせの月に小舟ながして

とは。こん年の夏東京に行かんと。翁の契

をかたむるなりけり。

見わたせばわが友ならぬ山もなし

こゝもへだてぬ森の下かけ

くれはてゝ。車に送られかへる。わが住む處は三階にて。夜に入れば川原涼みの燈火空にうつりて。手にとるやうなり。笛鼓の音。

米賣の聲など。たゞこゝもとなるも涼しきに。東山の火影星の如くうちむかはるゝなど。樂しき旅寝ならぬかは。

十四日。はる。昨日平野氏とやまめぐりの契しつれば。暗方寝さめて聞くに。雨の音するやうなり。くちをしやと戸を押しかけて見れば。空に一點の雲もなし。あな耳にぶ。はやくも川音にてありけるぞや。燈火のもとにて朝飯して。柳茶屋といふまで行く。三條の大橋を渡るに。東山の藍色にて打ち臥したるさま。朝景色は又ことなり。茶屋にて平野氏と出で逢ひ。八瀬を指して行くに。大原木いたゞきつれたる女。あまた出で来るに逢ふ。踏み分け行くほどに八瀬は果てゝ。大原村となる。音なしの瀧といふを見て。いく度も道踏み迷ひつゝ。もとの道に下り。小田の中道つたひして。西の山そばにうつりゆけば。瀧の清水としるべせる水あれど。實は名にしかず。猶おくふかく入

れば。寂光院なり。門は鎖したるやうに竹を横に二つ波せり。案内云ひ入るれば。四十の坂を上か下かの尼一人出で来て。御堂の方にといふに。わらち解き捨てゝ従ひ行く。本尊は地藏尊にてきらめきたせる奥の方に。建禮門院の御像を拜み奉る。墨染の御衣の上に。白絹をまとひ給へるやうにあぶるゝは。安徳天皇の御かたみの御衣なりとかや。御傍には阿波の内侍のも見ゆ。寺のさま座かねども。世の常のとは清らかにて。昔の姿を失はじと見ゆるは。尼寺のゆゑにもあるべし。庭に出でて見れば。御堂の前に池ありて。櫻の大木影をうつせるは。波の花こそとよませ給へる跡ぞとをしふ。

みゆきせし臘のしみづ影たえて

さきあたる花の春やいへはる

北に／＼と江文岐を越ゆ。是さへあるに。またひとつ静原村過ぎて。奴坂にあへるこそくしけれ。されど前に鞍馬に出でん望みある身は。猶何かに引かれゆく心地す。川一つ渡りて里におりぬ。疲れも甚しければ。しづかに休まんとて。酒命じなどするほどに。一夕立あらひ来る。今はとて勇氣を杖にて。八町の坂を上りつれば鞍馬寺なり。雨止みて夕日すし。

くらま山谷間のすぎのうらみえて

ゆふだつあとの風のすゞしき

猶奥の方に天狗杉を見て。僧正が谷にくだる。此山は麓より緑一面にて。入るにつれて老木枝をかはし。ひる物すごき處なり。かの杉のもとには供物などそなへたれば。神か何かのおはすらんと。おぼえず髪もふとる心地す。ふきすてゝ花にしばしの夜嵐も

神はこの木のものとなすらん

僧正が谷には大魔王の堂ありて。此あたりはことに暗し。夏もかきなる落葉踏み分けつゝ。やう／＼漲り落つる川瀬に降りつきぬ。貴船とぞいふなる。小橋渡りたる右の方に鳥居の立てるは。明神なり。本社は猶六七町も奥と聞けば遙拜して川に沿ひつゝ下る。

上加茂に詣でしは。入りかゝる日のいち高き杉に残れる頃なりけり。神殿のいろ。みたらしの音。例のいさぎよし。馬場などそれと聞きつつ川瀬に出でて。此所より車に乗り。平野氏とは道より別れて。すゞみの奥にいる頃宿りにつきぬ。今日あるきつる道の程は。八里もあるべしとか。

ひがし山ともし火青くまたゝきて

まくらになるゝ加茂の川風